

小学校国語科教材「源氏物語」(第四期国定教科書)の

反響・その二

—昭和十三、四年の研究・教師・児童の反応—

有 働 裕

昭和十三年四月から、国定教科書第四期にあたる『小学国語読本』、すなわち「サクラ読本」の、巻十一(六年生用)の使用が始まった。この教科書には、「源氏物語」という教材が収められている。これは、極めて斬新な試みであるという

ことでまず注目を集め、次いで、橘純一という国文学・国文学研究者が、国語解釈学会機関誌『国語解釈』誌上で削除を文部省に要求したことによって、大変話題となった教材でもある。

筆者は既に、この教材がどのような意図の下に編纂され、その本文がどんな特色を有していたかということについて、「小学校教材「源氏物語」と時局——「サクラ読本」における本居宣長——」(注1)で私見を述べた。また、この教材の何を橘純一は批判し、その背景にどのような意図があったかについて、「橘純一による「源氏物語」批判——削除を要求された小学校国語科教材——」(注2)において考察を試みた。

さらに、当時の教育関係者や現場の教師の、この教材に対する反響の一端を、「小学校国語科教材「源氏物語」(第四期国定教科書)の反響——使用開始から橘純一の削除要求まで、昭和十三年——」(注3)において報告した。

本稿はその続編として、昭和十三年における関連記事をまず取り上げて前稿の遺漏を補い、次いで昭和十四年のものを紹介しつつ、教材「源氏物語」に対する研究者・教師・児童の反応を概観しようとするものである。

なお、引用にあたっては、前稿同様、仮名遣い・改行・句読点は原文に忠実にし、漢字の字体はできるかぎり現行のものに改めた。

一、画期的な古典重視読本

昭和十三年の前半期は、橘純一による削除要求が本格化す

る以前の時期である。やはりかなりの目新しさを感じさせる教材であつたらしく、取り上げられる回数多きから、話題となつていたことが十分にうかがえる。ただし、前稿でも指摘したが、この時期の記事は、教科書編纂者の意図をなぞるような礼讃が基調となつてゐる。

『国語教育学会機関誌『国語教育誌』四月号の「国語教育試論——新読本卷十一の活用——」は、五氏による短い提言を収める。島津久基(注4)は「古事記と源氏物語」という題で、就中源氏物語が採上げられた事は、小学教育に、将た国定国語読本の編集に、実に一期を画するものといふべく、国民教化の向上を心まことに慶祝したいと思ふ。

と述べつつ、原文との関連で取り扱ひには十分な注意が必要であることを強調する。その同じ「国語教育試論」の中で、西尾実(注5)は、「古典文学教材」と題して、明治以降の国語教育が児童生徒の発達段階を考慮するあまり本質を見失つたと述べ、新読本で『古今集』や『源氏物語』が採用されたことを、近世国学の精神と関連させて高く評価する。

また、同じ号に載る石井庄司(注6)の「国語教育時評——小学国語読本卷十一を手にして——」は、この教材についての言及はごくわずかだが、

なほ「源氏物語」の口訳ぶり、また「法隆寺」の文化史考察等、自分流儀の好みからも、ふるひつきたいやうなものが多い。

という記述がある。

この『国語教育誌』の五月号の「国語教育試論」の欄にも、稲田伊之助(注7)の「新しさ」という文章が載る。卷一の冒頭から卷十一の「源氏物語」に至る一貫した「新しさ」が賛美され、新読本に対する一種の驚愕にも似た反応を読み取ることができる。

この春で卷十一まででき上つた小学国語読本は普通に新読本と呼ばれてゐる。何もかもが新しいからである。

当時の世間の驚きはまだ我々の記憶に新しい。挿絵が新しい。子供の服装、色刷り。コトガラが新しい。ヒカウキ、ラデオコトバが新しい。サイタサイタサクラガサイタ。本当に何もかもが新しい。卷二、三と進む。国びきが出る、早鳥が出る、かすみ立つ長き春を子供らと手まりつきつつ、これは万葉調だ。一茶の句が出る、雀の子そこのけそこのけお馬が通る、何と新しいことよ。卷十になる。千代の句、朝顔につるべ取られてもらひ水、も新しい。御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば、これは万葉の歌だ。中学校の修身や国史の教科書によくこの歌が引かれてゐる。(中略)それよりも「雪の山」これは枕草子の口訳である。王朝物の口訳が小学読本に出るなんて、これこそ破天荒の試み。これが新しくなくて何であらう。卷十一になる。古今集の歌が五首。見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦な

りける、やどりして春のやまべに寝たる夜は夢のうちに
も花ぞ散りける。鬼貫の句が出る。行水のすて所なし虫
の声、実に新しいではないか。それよりも源氏物語の口
訳。紫の君、源氏の君、イヌキ。この新しさにはもう口
が利けない。まことに新読本の名に背かない。

(中略)

古典は六百年、千年、千二百年の昔に作られた物では
あるが、心を潜めて読むとちつとも古くない、新しい生
命の泉の酌めども尽させぬ物がある。初初以来の太陽が
日毎に新しい光を放つてゐるのと同じやうに。周雖旧邦
其命維新。古今集はやはり新しく源氏物語も新しい。新
読本はやはりその名に背かない。

之を教へる我々国語教師も亦新しくなければならぬ。
今日作られて明日は捨てられてゆく営みにのみ没頭しな
いで、静かに永遠にへの努力を続けよう。古典の勉強に
身を入れよう。

このように、いささかオーバーに新読本のすばらしさを謳
い上げている。そして、その内容は、国字との関連の強調や
原文を参照させてはならないという注意まで、教科書編纂者
の意図のからほとんど踏み出していない。程度の差こそあれ、
これは、この時期の多くの「源氏物語」評価に共通する傾向
であった。

二、芦田恵之助と「源氏物語」

ところで、はやくも同年四月に、同月から使用が開始され
たばかりの巻十一の中の「源氏物語」を用いて、芦田恵之助
(注8)が実践を試みている。四月の二十三日(土)、二十四
日(日)の両日、東京の志村第一小学校においてのことであ
った。芦田は既に公職を退いていたが、当時は全国の学校を行
脚して授業を行っており、一月に十校以上回ることもあると
いう多忙な身であった。

新読本の使用と歩調をあわせて刊行されていた『小学国語
読本と教壇』の巻十一(昭和十三年四月・同士同行社)の執
筆中であつたため、同校の校長からこの教材を用いた授業
の依頼を受けたことは好都合であつたと思われる。さらにこ
の実践は『教式と教壇』(昭和十三年五月・同士同行社)に
おいても詳しく紹介されている。

この教材を取り上げた記事の多くが、おおむね抽象的な感
想に終始していることもあって、教材文の一文一文に解説を
付加していくようなていねいな実践記録が残されていること
は、この教材の受容を知る上で大変興味深い。すでに国語実
践の第一人者として半ば神格化されていた芦田は、どのよう
にこの教材を理解し、どのような実践を行ったのか。ここで
はこの二つの著作(注9)をあわせて、芦田の「源氏物語」観
を整理しておくことにする。

まず、芦田のこの教材に対する全体的な評価であるが、基本的には教科書編纂者である井上超のものと異ならない。

そして、次の『小学国語読本と教壇』の記述からもわかる通り、この教材の掲載を、我が意を得たりと礼讃している。

小学国語読本の十の巻に雪の山と題して、清少納言の枕草紙が出た。私はこれを見た時、これでは源氏物語が必ず出ると思った。枕草紙の本文から、雪の山のあらそひが取られたとすると、源氏物語もその説明位なことではすむまい。本文から取られなければ、片手落ちになると、人事ながら氣をもんでゐた。さて取るとなると、どのへんか。小学教材としては、稍縁の遠いもののやうに思つてゐた。十一の巻を手にするや、私は早速源氏物語を読んでみた。原作から出てゐる(一)と(二)に至つて、おしいたゞいてしまつた。明かに文学物を教材化する模範であると敬服した。新読本の雪の山と源氏物語によつて、我が小学国語教材の一生面が打開されたものと思ふ。これは心から感謝しなければならぬ事である。

さらに、『源氏物語』の原文と読み比べて、むしろ読本の方が魅力的だとまで述べている。そして、「自分は尋六程度」だからそう感じるまでだしながらも、読本のように書き下ろした「国民源氏物語」を文部省から出してほしい、と要求している。

『教壇と教式』もまた、井上が編纂趣旨について講演した

ものの筆録をまず紹介し、「源氏物語に対しては、肚の底が温もつて来るやうに感じました」と賛美することから始められている。両書とも、この教材を客観的に分析する以前に、編纂者に対する賛辞が記されているわけである。

ただし、その賛美にも芦田なりのアクセントのつけ方があった。それは、「若し紫式部が男であつたら、源氏物語のような仮名文はかなかつたでせう」「紫式部は、やつぱり女でなくてはならなかつたのです。」といった記述を、この教材の中心として扱うことであつた。これは、同じ読本の巻九の「国語の力」とも関連させて考えられている。

紫式部に関する説明は、本文以上に補説を要しないと思ふ。たゞ紫式部が女でなければならぬといふ批評は、補説を要する。九の巻の国語の力にも縁をひくと思ふが、国民の思想は、国語によらなければあらはされないもの、漢文の上にはしつくりあらはれないものとの意を知らせたい。終りによく読ませたいと思ふ。(『小学国語読本と教壇』)

「国語の力」は、明治期に国語学者上田万年が行つた著名な講演「国語のため」を教材化したものである。同教材は、日本人が等しく国語の恩恵を受けているとし、国語と国民精神の結び付きを強調して次のように記している。

我が国は、神代このかた万世一系の天皇をいただき、世界にたぐひなき国体を成して、今日に進んで来たので

あるが、我が国語もまた、国初以来継続して現在に及んでゐる。だから、我が国語には、祖先以来の感情・精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今日の我々を結び附けて、国民として一身一体のやうにならしめてゐるのである。若し国語の力によらなかつたら、我々の心は、どんなにばら／＼になることであらう。してみると、一旦緩急ある時、国をあげて万歳を唱へるのも、一つには国語の力があづかつてゐるといはなければならない。つまり、言語生活重視の姿勢と国粹主義・軍国主義への迎合とが一体となって展開するという、この時期の国語教育の歴史的性格を明確に反映した教材なのであった。

芦田はこの「国語の力」を視野に入れ、「国民精神涵養」のための教材、「女子教育」のための教材といった編集趣旨を生かし、音読朗読中心のきめ細かな授業を行っている。そして、次のようなやりとりでこの教材の授業を締めくくっている。

「(一)は紫の君の美しい姿、(二)は源氏の君の氣にかゝる事です、この(一)と(二)を併せたら何といつたらよいでせうか」

「其の時代の生活です」

「生活といふものには、高下のあることを考へなさいよ。これは上流社会の生活です。皆さんには学校生活とか、家庭生活とかがあります」

「(一)の中で、最も美しく書いてある所はこゝだと思ひます。着物も着たが、髪がとりわけきれいでせう。皆さんの髪もこの紫の君ほど長く伸ばしたら、きつときれいでせう。近頃は折角ぢやないよい髪を、こてでぢぢらす物好きな人もあります。考へなければならぬ事ですわね。」

「かういふ生活を、紫式部が人間の出来てゐる目で見たとつて、生れながらに文学の力のある天才の手で、国語でもつて書きあらはしましたから、世界的文学として、日本の誇りとなる源氏物語が出来たのです」(『教壇と教式』)

いささか女子向けの修身めいている点も含め、まさしく編纂者の意図にそくした結び方になっているといえよう。

ただ、このような芦田であっても、この教材に疑問を感じた部分がないではなかった。それは、「末摘花」を教材化した(二)の部分で、赤い絵の具を鼻に付けた光源氏が、紫の上に、

「いや／＼、赤い方がまだ増しだ。此の上、墨でも附いて黒くなつたら大変ぢやないか。」

という場面である。芦田は『教壇と教式』で、「こゝが最もわかりにくい」とし、原文が「平仲がやうに色どり添え給ふな」とあることをふまえて、『平中物語』のことが理解できなければ難しいとしている。

ただ、この疑問は芦田の意識の中で黙殺されていたようで、橘純一のような教材への疑問へは発展せず、『小学国語読本と教壇』の方では全く問題にされていない。

三、橘純一の批判以後

橘純一による「源氏物語」削除要求は、昭和十三年六月から十一月にかけて、『国語解釈』誌上で展開された。さらに橘の『文芸春秋』（昭和十三年十月号）への寄稿や、国会議員への働きかけなどもあつて話題となり、この教材に触れる際には、橘の存在を意識せざるをえない状況になっていたと思われる。

だが、研究者・教育関係者が正面から橘に反論を試みた文章は、決して多くはない。別稿で紹介した蓮田善明のものと後述する藤田徳太郎の文章くらいであろうか。多くは、橘の発言がなかったごとく無視するか、取るに足らない主張として簡単に言及するにとどめている。

たとえば、『国語教育誌』の昭和十三年十一月号の、冲山光（注10）の「生産の立場」（『国語教育試論』）は、「源氏物語」が日本人の優越性を感じさせる教材であることを強調する。

また、同誌昭和十四年一月号の、大久保正太郎（注11）の「日本精神について」（『国語教育試論』）は、「源氏物語」が「日本精神が如何なるものであるかを暗々のうちに教へる」教材

であると述べる。だが、このどちらにも橘のことはまったく触れられていない。また、『国語教室』（文学社）の昭和十三年九月号には塚本勝義（注12）の「戦時下の国語教育」が載るが、新読本巻十一の古典文学教材に関連して、わずかに、一部の評者は、かゝる非常時局に懐古的教材の指導をなす理由を解するに苦しむとも云うてゐるが、それが皮相の見解であることはいふまでもなからう。

と述べているにとどまる。

橘の削除要求は、根本的な発想に問題があるものの、本文批判の在り方は実証的で、それなれりの説得力をもつ論理が展開されていた。おそらくは、そのような論理を相手にすること、逆に吞み込まれることを懸念したのであらう。

もし橘を直接批判する文章を書くとしても、同じ土俵に立つことは避けた方がよい、ということにならう。そのような例を、藤田徳太郎（注13）の「古典文学の教育的意義」（『教育・国語教育』昭和十三年七月号）に見ることが出来る。橘の名前こそ出していないが、彼への反論として書かれていることは一読すれば明らかである。そこで藤田がまず橘批判の前提として強調したことは、「瑣末的な解釈主義」の否定であった。

つまり、初等教育で『源氏物語』を扱う意義は、あくまでも「源氏物語という不滅の古典について強く印象づける事」であつて、「読本の文にのみ執する事は、必ずしも最善の方

法」ではないとし、「自国の文学的伝統に信念と矜持とを持たしめる」ためには、「瑣末主義に拘泥しない精神が必要」であると述べている。教科書本文を無視することを勧めつつこの教材の価値を評価するという、教材「源氏物語」を肯定しているか否定しているのかさえもわからなくなるような無理のある論理といえよう。だが、教材の記述そのものの解釈を問題にする橘に対抗するためには、これもまた必要前提であつた。

その前提に立つて、藤田は次のように述べる。

此所に一言加へておきたい事は、源氏物語の如き類廃文学を取扱ふのは教育上不可であるとする説のある事である。源氏物語をもつて類廃文学とするのは一知半解の考であらう。幾多の誘惑、試練を経て、弱い人間が、次第に全円的な完成された人間性にまで高められて行く過程を描いたのが源氏物語であつて、それが女性の作者なるが故に女性的な現れ方をし、又、平安時代の雰囲気纏うてゐるに過ぎないのである。此の意味で、源氏物語は永遠の作であり、此の故に、多くの知識階級に愛読されて今日に至り、それは、最も価値ある国民的古典としての揺ぎなき価値を持つてゐる。これが国語国文の教育において取扱はれる事は極めて当然であり、此の作品の価値について、幼き人々の頭脳に印象づけようとするのは甚だ必要な事と考へる。(なほ、さういふ意味で源氏

物語を排撃する人々は、あらゆる古典を貶し、現代文学の、しかも階級思想を含む文学を最も価値ありとし、此の立場から国語教育をも批判しようとしてゐる、左翼思想を隠した人々に多いことを一言しておく。)

もし源氏物語を類廃文学と認める立場から考へれば、わが国の古典文学は、皆何らかの意味で類廃的であり不健全であるといふ事になるのであつて、それは古典文学の、殆ど全面的な斥非となる。(それは方丈記や徒然草の如き作品についても云はれる事になるのである。)故に、さういふ言説は殆ど問題にならないから、われわれは、さういふ古典文学の国民的教養の上における重要性を正しく確信してよいのである。国民的教材の進出を否定するような論議があるとすると、それは全く謂れない事である。

橘の論理を正面から取り上げて論破するのではなく、橘個人の学問や思想性とも関連のないことから取り上げて、文部省の方針を乱すものは許せないと恫喝する。蓮田善明の橘批判と基本的には同じ路線である。

藤田の論理にいささか無理があることは、奥水実(注14)にすぐに指摘されることとなつた。『国語教育誌』昭和十三年八月号の「国語教育時評」には次のように記されている。

これは、その限り当然な、正々堂々たる意見である。文部省にこれだけの確信があつたら、今日の源氏物語問題

は生じなかつたであらう。しかしその趣旨ならば、何故一行でもよいから原文を出して見せないのか。内容は第二である、形式を知らせねばならぬといふなら、さうなりはしないか。問題は、古典文学の教育的意義といふ所から進んで、古典的教材の提出及び取扱法、特に、小学校に於いてはどうするか、といふ所にある。

四、「源氏物語」に対する児童の反応

このような、いささか過熱ぎみの議論がなされている一方で、この教材は、児童にどのように受け止められていたのだろうか。幸いなことに、昭和十四年には、新読本の内容についての児童を対象としたアンケートが二つ報告されている。「源氏物語」の教室での受容を考える上で興味深い資料といえよう。

(1)「新読本各課に対する児童の印象(第一報告)」
岩波書店刊の雑誌『教育』の三月号に掲載された、石岡信(注15)の報告である。同号は「新小学国語読本批判」の特集号であった。

石岡が調査の対象としたのは、東京市芝区桜川尋常小学校と向島区隅田尋常小学校の二年生から六年生で、調査は昭和十二年十三年の二年間にわたって実施された。ただし、六年

生の新読本の使用は十三年からなので、「源氏物語」に関しては、両校の昭和十三年度の六年生、男子二百十八名、女子百九十七名、合計四百十五名がその対象である。

調査は、次のような質問紙を用いて行われた。

一、国語読本(前期用又は後期用)の課全体の中で、あなたが「すきだ」「よかつた」と思ふ課の題目を五つまで(五つなければあるだけ)書いて、何故「すきか」「よかつたか」そのわけをかいて下さい。

二、又その中で「つまらなかつた」「二度と読む気がしない」と思ふ課の課の題目を五つまで(五つなければあるだけ)書いて「何故つまらなかつたか」そのわけを書いて下さい。

その結果は、「すきだ」「よかつた」を十、「つまらなかつた」「二度と読む気がしない」を一として教材ごとに集計し、十の和を一の和で除した「指数」と、十反応と一反応の和を百人に対する歩合に直した「関心度」とによつて示されている。「源氏物語」を含む巻十一の調査結果は次頁の表のように報告されている。

石岡はこの結果を、編纂者の意図、すなわち「国民文学を中心に思想文化を具体的に教材化した」教科書であるということに注目して分析している。「日本刀」「松坂の一夜」「源氏物語」「皇国の姿」などの教材は、いわばこの意図に基づく中軸教材であり、関心度も高い。とりわけ女子の関心

第九表 卷十一 (六年)

六 男 女				六 男			六 女		
順位	題 名	関心度	指数	順位	関心度	指数	順位	関心度	指数
1	日本海海戦 (10)	53	72.33	1	66	144.00	2	38	36.50
2	日本 刀 (28)	44	35.00	2	56	—	6	32	11.60
3	空 中 戦 (27)	73	10.69	5	91	7.29	1	53	51.50
4	我は海の子 (15)	28	8.58	4	38	7.30	5	16	15.00
5	松坂の一夜 (13)	17	6.67	9	12	2.71	3	22	20.50
6	京 都 (8)	16	4.91	6	19	6.00	10	12	3.60
7	月光の曲 (23)	41	4.83	11	26	1.59	4	57	15.00
8	吉 野 山 (1)	16	4.08	7	17	3.88	8	14	4.40
9	源氏物語 (4)	36	2.78	22	25	0.80	7	49	8.70
10	姉 (7)	38	2.14	28	40	0.07	15	35	1.76
11	燕岳に登る (19)	23	1.85	15	22	1.00	9	24	4.22
12	瀬戸内海 (9)	18	1.81	8	14	2.88	16	23	1.37
13	電話の發明 (8)	23	1.77	3	22	8.40	22	25	0.67
14	泉國の姿 (11)	13	1.65	14	15	1.20	12	10	3.00
15	月の世界 (24)	19	1.39	10	24	1.79	19	13	0.86
16	蟲 の 聲 (20)	19	1.39	18	19	0.91	13	19	2.36
17	北 海 道 (14)	16	1.19	21	18	0.82	14	14	2.11
18	秋 (25)	20	0.98	26	20	0.34	11	19	3.22
19	歐洲航路 (22)	28	0.97	19	27	0.88	18	29	1.07
20	鐵眼の一切經 (26)	30	0.94	12	27	1.22	20	32	0.73
21	十和田紀行 (21)	10	0.91	13	9	1.22	21	11	0.69
22	樺太の旅 (17)	7	0.72	20	5	0.83	23	10	0.67
23	五月の太陽 (6)	19	0.64	24	19	0.64	25	18	0.64
24	法 隆 寺 (5)	14	0.57	23	15	0.78	26	13	0.37
25	見渡せば (2)	12	0.55	27	13	0.27	17	12	1.09
26	雲のさまざま (18)	26	0.55	25	24	0.47	24	27	0.64
27	間宮林藏 (16)	17	0.53	16	19	1.00	28	15	0.15
28	古事記の話 (12)	13	0.46	17	10	1.00	27	16	0.23

教 育 第 七 卷 第 三 號

度が高く、「知的に見れば高いものほど興味をもたれてゐる」と指摘した上で、「これ等の教材は児童の心性を顧慮するといふよりは国家的見地からの要求であることから考へても当然のことと考へられるのである」と述べている。

これは、児童の高い関心度を、教材そのものの魅力とは別の要素、つまり教える側の力の入れ方によつて左右されたものと分析しているように思われる。たとえ小学生であっても（むしろ、だからこそというべきか）、教科書編纂者の意図や教師の取り組み方を感じ取り、無意識のうちにそれに合わせた選択肢を選ぶことは十分にありうる。また、社会や世相の動向と教材に対する嗜好とは無縁ではない、ということも考えられよう。優等生ほど「源氏物語」や「皇国の姿」などの「中軸教材」に関心を寄せているというのは、その点で当然のことともいえる。この調査の結びにおいて、どの学年においても比較的長文の教材に高い関心が寄せられているにもかかわらず、巻九の「アメリカだより」のみが例外であることが報告されていることを、このことと考え合わせてみることもできよう。

(2) 「児童より見たる新読本巻十一（上）」

『教育研究』（東京高等師範附属小学校内初等教育研究会）の昭和十四年六月号に掲載されたこの小林佐源治（注16）の報告は、先の石岡のものに比べやや調査分析の厳密さを欠くが、

児童の感想がそのまま掲載されている点が興味深い。

調査は実際に小林が担当している児童、男子二十名女子二十名の計四十名を対象とし、好きか嫌いかあるいは普通かを尋ねたもので、その結果を次頁の表のようにまとめている。

そしてこの結果を整理して、「過半のものが好む課」として、「源氏物語」「五月の太陽」「日本海海戦」「我は海の子」「十和田紀行」「欧州航路」「月光の曲」「空中戦」「日本刀」をあげている。反対に「子供の嫌ふ課」は、「法隆寺」「姉」「皇国の姿」「鐵眼の一切経」である。また、「源氏物語」は「男女の比較的好悪の差の著しいもの」の一つでもあると指摘している。

「源氏物語」の評判の良さ、また、それが女子に集中していることなどは石岡の調査と同じだが、その他の教材についてはかなりの差が見られるものもある。小林の調査は一学級だけを対象としたものだけに、児童の受け止め方も、小林自身の嗜好や授業方法に左右されていると考えられよう。

そして、「源氏物語」に対する児童の批評・感想として、まずこの教材が好きだという者の、以下のような文章が引用されている。

△文のいひ表はしは細かく美しく優しく生き／＼としてゐて面白い。中の事がらは始の方は嫌ひだが中程から好きになる。（女）

△中の文が面白い。又わかりやすいので好きである。

兒童より見たる新讀本卷十一 (小林)

(女)

△紫の君の可愛いことや尼さんのやうす、源氏が紫の君を慰めた事などよく詳しく書けてゐるから好きである。

(女)

△人間を生き／＼と細かく美しく現はしてあり、平安時代の人の心や生活の優美なことがあるから好きである。

(女)

△紫式部が幼い時から天才であつたこと、紫式部の生ひ立ちや其の性質や大きくなつてからの事が始にかゝれ、そして源氏物語を著した起源がかいていある。文の言ひ表はしから見れば「きれいに作つたしほ垣のうちの僧庵に折から日がさして、西がははみすがあげられ、年とつた上品な尼さんが静かにお経を読んでゐる。」これはほんの物語の中の一部であるが、これだけを読むだけでも源氏物語がいかに上品にやさしく細かく美しく書いてあるかがわかる。僕はこんな文は大にまねて見たいと思ふ。

(男)

△女らしいやさしい文だが、僕はあまりすかない。しかし文のたくみな書きぶりには感心する。そしてすぢも面白い。(男)

続けて、この教材が嫌いだという、以下のような児童の感想が紹介されている。

△文はよくかけてゐるが、どうも女々しくて元気がない

から嫌ひだ。しかし中の事がらや文の言ひあらはしはよい。(男)

△すこし優美すぎるからきらひだ。(男)

このような批評・感想を受けて、小林は次のような所感を述べている。

女兒には特に好まれる材料であり、同時に男子にも相当な信者をもつてゐる面白い材料であるし、よい材料で、たしかに文は上手に書いてある。採つた所も決して悪くはないと思ふ。この文については世間で随分批評があつたが、僕はそれほど悪いとは思はない。又世間一部の人のいふやうにそれほど心配することはないと思ふ。

世間での批評というのが橘純一の削除要求を指していることはいふまでもない。

この数名の感想から児童の一般的な受け止め方を想像することは避けるべきであらう。だが、彼らの興味が、世界に誇るべき日本文学の傑作であることを強調した解説部分にはなく、「若紫」「末摘花」に取材した部分の文章表現に集中していることは興味深い。教師の教え方にもよるだろうが、やはりかなり特異な文章であると感じ取ったのではないだろうか。先の石岡の見解とは異なつた児童の反応を見ることができ。

ただ、このような優美な描写に児童が引かれるとすればそれだけ、橘が危険と感じたこと——そこに恋愛感情を見出し

するものであり、そして、独自の観点からこの教材の意義を述べるというよりも、教科書編纂者の意図をふまえて、それをあたかもなぞるように書かれたものであった。それゆえに、その礼讃の仕方も、教材の価値や意義を抽象的に記したにとどまっている。

昭和十四年七月、『教育研究』の臨時増刊号（「新興日本国語教育」の特集）が刊行された。同号は五月二十日から五日間にわたって開催された「第五十二回全国訓導（国語）協議会」の記録であり、約八十名が執筆している。その中にはいくつか「源氏物語」に言及したものも見られるが、やはり古典重視・国民精神涵養という新読本全体のテーマを称揚しつつ触れるにとどまっている。

このようなところに、当時の教育関係者、教育ジャーナリズムの性格がよく現れているといえよう。いささか意地の悪い言い方をするならば、文部省の顔色をうかがいながら何のオリジナリテイもない字句を並べているだけで、あえて活字にするだけの意義はない。もちろん当時としては、このような意思統一のための「総決起集会」こそが「必要」とされていたのである。

そういった人々が橘のような論難に対抗しようとする場合、正面から取り組むことには危険を感じたであろう。まずは無視をする。取り上げる場合には、かかる非常時に政策批判を行い、教育改革の足並みを乱すとは何事か、と「国民的」な

「和」を強調して、国定の教科書を批判するという行為そのものを否定する。あるいは、橘個人の人格を誹謗中傷し、信頼するに値しない学者であることを強調する。このような論法がとられたわけである。

この「源氏物語」の掲載は、これまでどう評価されてきたのか。これも別稿で述べておいたが、大正から昭和初期にかけての文学教育の隆盛の影響を示すもの、という解釈が一般的なのであろう。大正デモクラシーの名残としての「文学読本」というとらえ方である。さらには、編纂者井上超自身による、自由主義の立場からの軍国主義への抵抗という評価もなされている（注18）。このようにとらえると、いかにも橘一人が悪役であるかのように見えてくる。

だが実態は、「源氏物語」擁護・推進イコール時流への抵抗、「源氏物語」批判者イコール時流への迎合、と割り切れるほど単純なものではない。やはり「源氏物語」という教材の登場は、見事に当時の時流に適合した出来事であったというべきだろう。そして、橘純一という学者が果たした歴史的な役割は、結果的に、その激しい教科書批判によって、「源氏物語」と国粹主義・軍国主義とを強固に結び付けた発言をより多く引き出してしまった、ということにあったのではないだろうか。

戦時体制下において、文学の自律的な価値の尊重、自由主義・個人主義の文学観の提唱など、堂々とできるはずはなかった。

たり、『源氏物語』の筋への関心が高まったりすることの可能性も考えられることとなる。小林の所感は、橘から見ればあまりに樂觀的ということになるうか。

いったい児童はこの「源氏物語」という教材をどのように受け止めたのか。どのような教材であっても、その反応を単純化・一元化して述べられるものではないだろう。だが、とりわけ「源氏物語」については、別稿（注17）でも述べたように、教材本文そのもののかかえる矛盾が影響していると思われる。

この教材の意義、編纂趣意書等に記された建前としての価値は、教材前半の解説部分、とりわけ「源氏物語五十四帖は、我が国第一の小説であるばかりでなく、今日では外国語に訳され、世界的の文学としてみとめられるやうになりました」というところにある。世界に誇れる文学を生み出した国民精神の称揚である。

ところが、さまざまな苦心と配慮の末にできあがった現代語訳の（一）（二）の部分は、それにとらわれない性格を結果として持ってしまった。『源氏物語』本文を参照させてはならないとはしながらも、（一）（二）の関連は説明されておらず、原作への関心を高めさせてしまう。また、教育的配慮から省略の多くなった本文は、読むものの想像力を喚起する。すべてが説明され、わかりやすすぎるような読本の教材

文中にあって、やや異色の文章であった。

石岡と小林の二つの調査の結果も、この矛盾した性格と関連している。石岡の児童の反応は、いわば編纂趣意書通りの価値観に強い関心をいだいたと思われるが、小林の児童は現代語訳の文章表現そのものにひかれていくようである。どちらの調査でも児童の好きな教材となっているものの、どこに重点を置いた授業であったかで、その内実は異なったものとなる。

また、この目新しい教材に、すべての教師が前向きに取り組んだわけではなかった。この教材については、折にふれて当時小学校で学んだ世代の方に直接話をうかがっている。また拙稿をお読みいただいた方から、貴重な体験談をご教示いただくこともある。そのようにして得た断片的な情報にすぎないが、扱いにくい教材、教師自身が好まない教材としてやや粗略に扱われたケースもあったようである。この教材を学んだことをきわめて印象的にこの教材を記憶している方がいる一方で、ほとんど記憶にないという方も少なくない。

五、結びにかえて——もう一つの「源氏物語」批判

以上、教材「源氏物語」をめぐる昭和十三、四年における記事を、管見の限りではあるが、別稿とあわせて二十数編取り上げた。繰り返しになるが、その多くは「新しさ」を礼讃

た。歴史的状況を考慮せずに、当時の教育雑誌等での発言を取り上げて、その執筆態度を厳しく批判すべきではない——本稿はそのような非難を受けるかもしれない。確かに、その点については十分な考慮が必要だろう。

だが、その点を考慮したとしても、具体性を欠いた評価、ご都合主義の礼讃が多すぎる。その中であって、『教育』昭和十四年三月号の特集「新小学国語読本検討（新読本批判）」は、そのタイトルからして異色である。もちろん戦前・戦時下のこの雑誌、あるいは岩波書店の活動すべてを一樣に評価することはできないが、少なくともこの号に関しては、良心的な企画であったといえる。

その号に、橘のような国粹的な発想とは別の立場から、独自の見識をもって「源氏物語」を批判した論が載っている。

平田英夫（注19）の「教壇人の感懐——好きな教材・嫌ひな教材を中心に——」である。

一体国語読本の教材の中には、思想ばかりお先走りをした舌足らずの教材が多い、さうして酸くもなく甘くもない全然ひつかかりといふものない無味乾燥の文が多い。以前の読本もさうであつたが今度の読本も矢張さういふ個処がかなりあるやうに思ふ。さうして四年より五年、五年よりも六年と上へ進めば進む程この傾向が強い。つまり文章を、国語を、一つの生活技術とみないで、文章を文章として教へようとする態度である、勿論文章で

ある以上は辞書の中にある言葉よりは美しくなくてはならないけれど、必要以上美しさを誇張する必要はなからう。説かんとすることは著しく理屈つぼく、書かれた文章は晦渋を極めてゐる。読本は第二の国民教科書であるから日本一色に塗りつぶすこともよからう、よからうけれど言はんとなすことと書かれてゐることが、離れ離れに同じやうな顔をしてゐたのでは誠に意味の少い国語読本だと謂はざるを得ないだらう。

例へば「源氏物語」の如きその適例である。ここでは日本古典文学の源氏物語が如何に生き生きと美しく人間の生活を書いてあるかを知らせるために、その現代語訳を勇敢にやつてのけてゐる。けれどもそのなんと貧弱なことか。編纂官氏の考べようとする幾分の幾つがここに書き現はされてゐるだらう。なる程書かれた文章は実に秩序整然としてゐて、どこそこみんな一点非のうちどころのない文章である。名文とまでは言ひ難いだらうが正確な文章だと言ふことが出来るだらう。だから教材を一瞥すると、文章としてまとめようまようまようと掛つてゐる編纂官氏の辛苦だけが、第一われわれに強く伝はつてくるのである。つまりからまはりをしてゐるのである。内容のともなはぬ文章である、内容のともなはぬ文章は、所詮からまはりをしてゐるとしか思はれない。強がりをならべてゐるとしか思はれない。

今日の読本が第二の国民教養読本としてのよき意図を有してゐるにもかかはらず、難解にして晦渋困難であるといふ声を、われわれは教壇の実践人からしばしば聞く、その過半はこのよき意図の重圧の下から洩れる嘆息なのである。

「源氏物語」本文の具体的な分析こそ欠くが、画一的な国民精神に従属させられた古典文学教材への疑問、編纂意図と現代語訳の内容との矛盾などを指摘している。巧みに言葉を選んで慎重に述べているために、いささか文意が通りにくくなっているが、このような論述にこそ時局への抵抗の精神が隠されていると考えるべきではないだろうか。

注1 「小学校教材「源氏物語」と時局——「サクラ読本」における本居宣長——」愛知教育大学国語国文学研究室編『国語国文学報』第五十五集、一九九七年三月。

注2 「橘純一による「源氏物語」批判——削除を要求された小学校国語科教材——」愛知教育大学教科教育センター『研究報告』第二十二集、一九九七年三月。

注3 愛知教育大学『研究報告』第四十七輯、一九九八年三月刊行の予定。

注4 島津久基（一八九一—一九四九）。戦前は、一高教授、東京大学助教授、東洋大学国文学科長等を歴任

した後、昭和十八年から東京大学教授となる。『対訳源氏物語講話』等の著作もあり、『小学国語読本総合研究』巻十一（岩波書店・昭和十四年）の「源氏物語」の解説を執筆している。

注5 西尾実（一八九一—一九七九）。当時は東京女子大学教授であり、国語教育学会常務理事。戦後は国立国語研究所の初代所長、法政大学教授等を勤め、中世文学と国語教育に多くの業績を残す。

注6 石井庄司（一九〇〇—）。戦前は東京女子高等師範学校教授、東京高等師範学校教授等を歴任。戦後は東京教育大学教授、東海大学教授を勤めつつ、全国大学国語教育学会初代理事長や文部省関係の数多くの委員を歴任。

注7 稲田伊之助。当時は愛媛県立西條中学校教諭。

注8 芦田恵之助（一八七三—一九五一）。戦前は東京高等師範学校附属小学校等に勤めた後、朝鮮国語読本、南洋群島国語読本などの編纂に従事。『読み方教授』等数多くの国語実践に関する著作を残すとともに、雑誌『同志同行』を創刊・主催し全国を行脚するなど、教育現場に大きな影響力を持った。

注9 いずれも明治図書社の『芦田恵之助国語教育全集』に収められている。『教式と教壇』は巻十二、『小学国語読本と教壇』は第二十巻。

注 10

冲山光（一九〇五）戦前は青山師範学校附属小学校等に勤め、戦後は文部省の教科調査官として戦後の国語教育の基盤確立に深く関与した。

注 11

大久保正太郎。当時は東京市本郷区第一実業女学校教諭。国語教育学会編『国民科国語の指導 ヨミカタ一』（昭和十八年・岩波書店）の執筆者の一人。塚本勝義。当時は茨城県立水戸中学校教諭。『会沢正志の思想』（昭和十八年・昭和図書）、『藤田幽谷の思想』（昭和十九年・昭和図書）などの著書がある。

注 12

谷の思想』（昭和十九年・昭和図書）などの著書がある。

注 13

藤田徳太郎。当時は浦和高等学校教授。国学・和歌・歌謡関係の論文が多数ある。岩波文庫の『松の葉』（昭和六年）・『声曲類纂』（昭和十六年）の校訂・校注などを行っている。

注 14

興水実（一九〇八―一九八六）。当時は東京市仰光西小学校訓導。戦前は東京市新泉小学校等に勤め、戦後は文部省教科書編纂委員、教育課程審議会委員等を歴任。学習指導要領の編集にも深く関わった。石岡信。当時は芝区桜川小学校に勤務。

注 15

注 16

小林佐源治。当時は東京高等師範学校附属小学校教諭。

注 17

注 1の拙稿。

注 18

井上超著・古田東朔編『国定教科書編集二十五年』

昭和五十九年、武蔵野書院。

注 19

平田秀夫。当時は静岡県富士川小学校に勤務。

付記

石岡信の調査の存在については、府川源一郎氏にご教示を賜りました。記して深謝申し上げます。また、先に成した拙稿をお読みいただいた方々、特に「源氏物語」を実際に教室で学んだ世代の方々から、多くの貴重なご教示を賜りました。深謝申し上げますとともに、本稿につきましてもご教示・ご批評を賜りますようお願い申し上げます。

（うどう・ゆたか、本学助教授）